

妻の美千子と始めた隔年毎に催している我々の室内楽シリーズも今秋で第 3 回目を迎える。第 1 回は 2006 年のモーツァルト生誕 250 周年でモーツァルトを、第 2 回 2008 年はブラームスを取り上げた。今回の第 3 回はフランクを取り上げヴァイオリンソナタとピアノ五重奏曲を演奏する。

フランクのソナタを私は多くのピアニストの方たちと協演した。ほぼ年代順にお名前を挙げると、学生時代にミュンヘンで H. シラー君と、ソロ活動をするようになってからドイツで G. シューベルト氏、K. ヘルヴィッヒ氏等、しかしドイツ滞在時代、最も強く印象に残っているのは、演奏旅行の途中にピアニストの梶原完氏のお宅に伺った際、氏とベートーヴェンのスプリングソナタとともにこの曲のお手合わせを願った時のこと。この 2 曲に梶原氏のご造詣はとても深く、種々、テンポのこと、微妙なダイナミックとアゴーギックのニュアンスについてご指示をいただいた。丁度氏が私と一緒に弾きになり乍らレッスンをしてくださったのだ。その時の体験は私にとって貴重な宝物の様な意味を持っている。というのも氏のおっしゃった事、一つひとつが納得のいくことで、それをきっかけとして永年に亘って私独自の解釈を自信を持って行える様になったからである。梶原完氏を現在は識る人もわずかかも知れないが、園田高弘氏や松浦豊明氏などよりも一つ上の世代で、日本に居られる頃から大変高名で、戦後、間もなくヨーロッパに行かれ、ソリスト、室内楽奏者として華々しく活躍なさった方だ。録音が残っていないのが惜しまれてならない。

その後、オランダの名手ヘルマー・ラールホーン氏と協演、彼には日本にも来ていただき、1970 年代にレコード録音を残した。帰国してからは深沢亮子氏、音川絃一氏ともご一緒した。また 1980 年代後半から岡本美智子氏と度々協演し、90 年代に、ルクーのソナタとカップリングして CD 録音し、充実した演奏が残せたと思う。

最近、といっても 2007 年になるが、スロヴァキアの名ピアニスト、マリアン・ラプシャンスキー氏とも協演し、氏のスケールの大きな解釈は強く印象に残っている。

今回は妻美千子が是非やりたいとの意向なので取り上げた。この曲はヴァイオリニストにとって種々の意味で力いっぱい弾ける曲だが、毎回、協演ピアニストのGusto（趣味や方向性、テンション等）を慮った上で自由に奏しなければならないので難しいが、しかし大変弾きがいがある。

ピアノ五重奏曲は大きな悲劇性を持った悶々とした曲で力強い、内面的なエネルギーにあふれている。ソナタ同様に夢見るような抒情性も美しい名曲だ。

残念ながら、録音には納得できる優れたものが少ない。これはピアニストの技量と四重奏団の実力の不均衡と両者の求めているものの相違に起因する様だ。解釈として響きの透明性を追求することが容易ではない。というのも、フランクの書いた弦のテクスチャが少し重厚過ぎるのだ。

この曲の初演では、フランスの名ヴァイオリニストで、また名教師でもあったマルシックが四重奏団を率いて、サン=サーンスがピアノパートを受け持った。曲はその彼に捧げられているのに、サン=サーンスはこの曲を演奏し終わるやいなや、会場から姿を消したとのことだ。下衆の勘繰りでジェラシーその他様々に考えられるが、私は、サン=サーンスの様に、一方では透明で古典的でありまた他方、内容に乏しい空虚な美のみを追求した曲を書いた人間には、このドロドロした、最後は悲劇的クライマックスに終わる曲が、吐き気がするほどにいたたまれなかったのではないかと愚想している。という訳で、今回我々のアンサンブルに課せられたものは大きいですが、皆の目指す方向がリハーサルを重ねる中ではっきりしてきたので、力一杯頑張って邁進できると思っている。